



MONGOLIA

学校名：学校法人上田学園 上田西高等学校

氏名： 正村 真一

[担当教科： 地歴公民]

- 実践教科等： 地理B
- 時間数 ： 7時間
- 対象生徒 ： 高校3年生
- 対象人数 ： 38人

1 単元名

モンゴル理解・日本の国際協力の在り方

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

- ①モンゴルを通して異文化を理解しようとする態度を育てる（多面的総合的に考える力）。
- ②日本の協力・支援を切に必要としている人がモンゴル（開発途上国）にいて、開発途上国からの支援要請を受けて日本が人の手を介した支援を実施していることから、日本が世界の人々と協力していく大切さ・支援の在り方を考えてもらいたい（他者と協力する態度）。
- ③JICAが今まで実施してきた国際貢献を知り、開発途上国で日本と途上国のために汗流し活躍している日本人がいることを理解する（他者と協力する態度）。
- ④相互扶助・国際貢献を考えることで、自らの高校卒業後の将来設計に対して多面的に視野を広げたい。夢を持ち、自ら行動することの価値に思いを巡らせたい（未来像を予測して計画を立てる力）。

3 ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・日本の文化との比較を通して、モンゴルの自然・文化・社会を地理・歴史的観点から考察し、その違いに気づく。【多様性】
- ・モンゴルと日本との様々なつながりから、グローバル社会全体における相互性に気付く。【相互性】
- ・モンゴルと日本の物的・人的なつながりについて知り、互いに協力し合う大切さに気付く【連携性】
- ・東日本大震災を通して日本が今まで行ってきた支援の重要性に気づき、相互扶助について考え、将来の日本の国際社会で果たす役割について考えることができる【責任性】

4 単元の指導について

（1）教材観

今後ますます国際化・多様化する社会の中では、「国際協力」「異文化理解」「共生」「持続可能な社会」は大切なキーワードになっている。お互いの違いを尊重しながら共に生きる心と、自ら考え、判断し、主体的に生きる力をはぐくむことが必要である。そのためには、知識習得を中心とした学習だけでなく、参加型学習により、自ら判断し行動していく授業の展開が求められる。そこで、フォトランゲージ・バーン村の実践を展開し、生徒の協調性・能動的な発言力を養うことができる。そして、生徒が身近な視点でとらえることができるように「目に見える形」を心掛けた。教師自身のモンゴル体験談、東日本大震災時の被援助国としての日本、生きた教材、青年海外協力隊員の生話を設定し、私たち自身と深い関わりに基づかせ様々な視点から考察させる。

（2）児童生徒観

国際教育は学校教育の柱の一つであり、修学旅行も海外、そして短期・長期の留学、国際交流も広く実施されており、外国文化に触れる機会が多い。しかし、開発教育という視点で、学校全体として、体系的、計画的に設定していないため、生徒の国際理解を深めることが十分にはできていない。担当のクラスは高校3年であり、クラスの6割の生徒は大学進学、3割が専門学校進学、1割の生徒が就職を希望し、おおかた進路が決定している生徒が多いが、「大学に進学するけどやりたいことがない。」と将来に対し不安を抱いている生徒も少なからずいる。国際協力に関心が高く、意欲的に発言する生徒もいる一方で、話し合いや発表において論理的に思考し、さらに考察した過程や結果を、根拠を示しながら表現すること、因果関係を推測すること、課題を多面的に考察することが苦手な生徒が多い。

(3)指導観

【全体より】

- ・国際社会に生きる一員として、多様な視点から物事を考察し、高校生である自分たちにできることは何か、また変容、将来像を予測し、より良い解決策は何かを主体的に考える機会を設定した。
- ・現場で汗を流している隊員の生き方を示すことで、高校3年生の今、自分の将来設計キャリアの一助となる「美しい生き方」に焦点をあて生徒の自身の将来像に活かすことに留意した。
- ・モンゴルを通じた参加型学習を展開し、「国際協力」「異文化理解」「共生」「持続可能な開発」「相互扶助」のキーワードを念頭におき指導にあたる。
- ・社会のグローバル化が進み、世界が近くなったと言われる昨今、国際社会に生きていく生徒たちにとって、広く世界に目を向け、外国や外国の人々に関心を持ち、異文化理解・自国文化理解を進め、お互いに認め合い、尊重し、協力、共生する態度や能力を育てていきたい。

【地理的視点から】

- ・こうした学習は、地理Bの目標である「現代世界の地理的事象を系統地理的に、現代世界の諸地域を歴史的背景を踏まえて地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」方向性とも合致する。
- ・モンゴルにおける遊牧民の生活が、なぜそこでそのようにみられるのか、また、なぜそのように分布したり移り変わったりするのか、秩序などを成り立たせている背景や要因を、環境条件や他地域との結び付きなどと諸地域を比較しながら、人間の営みとのかかわりに着目して追究したい。

5 評価規準

観点	関心・意欲・態度	思考力・判断力・表現力	技能	知識・理解
評価規準	異文化へ意欲関心を示し、授業の学習内容や追究過程を応用させながら臨んでいる。	現代社会の相互扶助とはいったい何なのか、なぜ支援は必要なのか、を追究することができる。	追究過程において、各資料から検証に必要な社会的事象を読み取ることができる。	思考・判断の追究過程を説明することができる。「国際協力」「援助」「相互扶助」などの語を用いることができる。
評価方法	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 感想・アンケート

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	【写真から学ぶ、日本とモンゴルの共通点・相違点】	・自分と他者とのモノの見方や価値観の違いを知る。 ・モンゴルと日本の共通点や相違点について考える	・フォトランゲージ(模造紙に教師が選んだモンゴルを象徴する代表的な写真を張り付け、班ごとに自由に気づいたことを書き込む)を実施し、その後、写真のタイトルを設定し、班ごとに全体で発表をする。
2	【ワークショップで考える支援のあり方】	・援助は「ものやお金を贈る」ことでよいのか、「必要な援助とは何なのか？」国際協力について考える。 ・援助が現地に与える影響、してはいけない援助について考える。 ・現地の人々の意見を聞くことの必要性に気づく。 ・自分たちができることは何かを考える。	・『「援助」する前に考えよう-参加型学習とPLAがわかる本-』(開発教育協会)のワークショップのワーク1「1枚の看板」を実施し、寄付をするのかしないのか、寄付するとしたらいくらかするのかとその理由を班の中で交換し合い、班ごとにまとめ、全体で発表し合う。 ・ワークシートに「気づき」を記入する。

3	【モンゴるんるんクイズ①問題編】	・モンゴルについての理解を深める。	・教師のモンゴル経験に基づいた、モンゴルを理解するための「モンゴるんるんクイズ」を実施する。 ＜問題の構成＞（全 63 問） ・自然環境 ・経済（モンゴル人年収・物価・貿易品目） ・モンゴル人、文化、生活（衣食住） ・モンゴル語 ・モンゴルの学校の様子 ・JICA 青年海外協力隊員の活動 ・教師海外研修参加教員 ・モンゴルと日本の関係
4・5	【モンゴるんるんクイズ②回答編】 （30 分）	前時「モンゴるんるんクイズ①問題編」と同じ	・前時に実施したクイズの答え合わせを行う。
	【震災から考える相互扶助】 （30 分）	・被援助国としての日本の姿と、日本がこれまでに実施してきた国際貢献について知り、相互扶助について考える	・東日本大震災時における救助活動、教師が実施したボランティア活動と各国からの支援について知り、「相互扶助」について考える。
	【現場で活動する青年海外協力隊員】 （30 分）	・ODA の概要、JICA の活動を理解する。 ・現場のニーズについて理解する。	・ODA・JICA の概要について知る。 ・モンゴルで活動している青年海外協力隊員について知る。
6	【青年海外協力隊による出前講座】 講師：JICA 群馬デスク矢部哲也氏 （元青年海外協力隊ガボン派遣）	・人の手を介した温かい「生」の援助について理解する。 ・今後の自分の将来設計につなげて考え活かす。 ・夢を持ち、自ら積極的に行動することの大切さに気づく。	・青年海外協力隊員として、アフリカのガボンで 2 年間活動した矢部元隊員を招き、JICA の事業と青年海外協力隊としてのガボンでのボランティア活動について知る。 ・Q & A の実施（事前に矢部元隊員への質問を生徒に考えさせ、回答を準備していただいた）
7	【今自分ができていることを考えよう】	・身近な同じ高校生の「国際協力」における意見を読むことで、今の自分にフィードバックし、自分自身が今できること、そしてこれからやりたいことについて多面的に考える。	・「JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」において 2013 年度最優秀賞を受賞した、現在上田高校在学の青木至人君の作文を紹介し、「今の自分にできる国際協力」についてワークシートにおいて意見を記入する。

7 授業事例の紹介

小单元名【震災から考える相互扶助と、現場で活躍する青年海外協力隊】

（1）指導案

（ア）実施日時 11月11日（火）第2・3限（9:00～10:30）

※通常の授業時間を変更して 90 分間の連続した授業を実施した

（イ）実施会場 学習室2教室

（ウ）本時の目標

- ①モンゴルを通して異文化を理解しようとする態度を育てる。
- ②日本の協力・支援を切に必要としている人がモンゴル（開発途上国）にいて、開発途上国からの支援要請を受けて日本が人の手を介した支援を実施していることから、日本が世界の人々と協力していく大切さ・支援の在り方を考えてもらいたい。
- ③JICAが今まで実施してきた国際貢献を知り、開発途上国で日本と途上国のために汗水流し活躍している日本人がいることを理解する。
- ④相互扶助・国際貢献を考えることで、自らの高校卒業後の将来設計に対して多面的に視野を広げたい。夢を持ち、自ら行動することの価値に思いを巡らせたい。

(エ)指導のポイント

- ・モンゴルにおいて撮影してきた写真・動画、購入した多くのモンゴルグッズを利用し、視覚的に生徒の興味関心が引き出せるように提示する。
- ・東日本大震災の時の被援助国としての日本を紹介し、今まで日本が実施してきた国際貢献の大切さを「目に見える形」で提示し考えさせる。
- ・実際に活動した隊員の生の姿を伝えることで今後の自分のキャリアを考えることにつなげる。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 30分	<ステップⅠ(導入)> 実際のモンゴルグッズ(民族衣装や飲物)を用いて、五感で異文化を理解させる。				
	・前時に実施した「モンゴルんるんクイズ」の答え合わせを行う。	・スライドを見ながら、前時に記入した回答用紙の答え合わせを各自で行う。	PP	・意欲を引き出すために4択の解答を生徒の実情に合わせ工夫したり、賞品(モンゴルグッズ)を準備する。	・学習活動の観察(姿勢・発言・参加意欲・態度)
展開① 30分	<ステップⅡ>(展開①) 日本が当時世界一の被援助国であったこと、援助をしてくれた国の多くは、今まで日本が援助活動を実施していた国が多いことに気づき、「相互扶助」について考えさせる。				
	・動画を流す ・教師の体験談を話す ・ワークシートの配布と解説	・東日本大震災時の、警察、消防、自衛隊による救助活動の様子について知る。 ・教師自身の石巻でのボランティア活動体験談を聴く。 ・震災時の各国からの支援について、空欄補充式のワークシートを使って知る。	動画 スライドショー ワークシート	・動画・スライドショーが続くので、質問を投げかけながらメリハリをつける。 ・東日本大震災の甚大さにだけ気持ちが向かないように配慮する。 ・「相互扶助」のキーワードをおさえる。	・学習活動の観察(姿勢・発言・参加意欲・態度) ・ワークシートの記述内容
展開② 30分	<ステップⅢ>(展開②) 日本の国際協力と、その一例として、青年海外協力隊が現場のニーズに基づいた活動を実施していることを理解させる。				
	・ワークシートの配布と解説 ・動画を流す	・ODAとJICAの概要について、空欄補充式のワークシートを使って知る。 ・モンゴルで活動している青年海外協力隊員の池田隊員ムービー・池田隊員にバスケット指導を受けている女子高生の動画を視聴する。	ワークシート 動画	・隊員(援助をする側)と、指導を受けている生徒(援助を受ける側)の両方の立場の声を伝え、2時間目において考えた援助のあり方(現場のニーズを聞く大切さ)と重ねて考えさせる。	・ワークシートの記述内容
まとめ	・次時の説明	・次時の講師(元青年海外協力隊 矢部氏)を紹介する。			

(2)授業の振り返り

「目に見える形」を意識して授業実践を行った。クイズにおいては、選択肢の写真を選し、スーターツァイ・デールなどのモンゴルグッズを利用し視覚に訴えた。「相互扶助」においては、先進国である日本が開発途上国に向けて援助を行うベクトルを考えてしまいがちであるが、東日本大震災時、世界一の日本は被援助国であり、手を差し伸べてくれた国の多くは日本が今まで援助をしてきた国である「目に見える形」での援助。授業後にJICA隊員の生の奮戦記の講演を聞くことで、「目に見える形」で国際協力を考え、さらには自分の今後のキャリアへつながる「生き方」を深めることができた。

(3)使用教材

- ・「モンゴルんるんクイズ」スライド(抜粋資料)



・「日本は世界一の被援助国」ワークシート(空欄補充)

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災

(東北地方太平洋沖地震およびこれに伴う原子力発電所事故による災害)

外国からの日本への支援…(174)カ国 (43)の国際機関

阪神・淡路大震災の際に倍以上の支援国数

2011 年⇒日本は世界最大の(被援助)国!!!

金銭的支援は、174 ケ国・地域から合計約(1640 億)円。

2011 年緊急人道支援 ソマリア 約 713 億円(被援助第2位)

(174)ヶ国のうち(119)ヶ国が日本の(ODA) 対象国からの支援
(ODA) 等過去の日本の(援助)に対する(感謝)に言及する国も数多い。

(4) 参考資料等

・『地球の歩き方 モンゴル』ダイヤモンドビッグ社 2013

・一般財団法人 国際開発センター「東日本大震災への海外からの支援実績のレビュー調査」

<<http://www.idcj.or.jp/pdf/idejr201201.pdf>> (2015 年 1 月 20 日アクセス)

8 単元を通じた児童生徒の反応/変化

[生徒たちの感想]

・世界には学校に行けない子供たちがたくさんいる中で、そのような子供たちを救っていけることができたらいなと思いました。私も困っている人がいたら助けたいです。

・私も次、もし外国で何かあった時には、少しでも力になりたいです。

・私は、違う国のことを少しも考えていなかったけれど、これからは何か他の国のためになるようなことを考えてみたいです。

・今回学習したことを胸に、将来できることがあれば、ボランティアや青年海外協力隊に積極的に参加して、発展途上の国へ行って現状を知り、どんな小さいことでも力になれば良いなと思いました。自分自身の視野を広げたいです。

・私にもできることはあるのか、このままで良いのかと考えさせられました。この学習を通して何かできることがあればやりたいと思った。

・自分は平和の中において与えられた生活を生きるのが精一杯ってというのは、自分への情けなさを感じました。まずはその国のことに興味を持つこと、知ることから始まると思った。私も国際活動に少しでも参加できるようにできることからやっていきたいと思います。

[考察]

「国際協力」をキーワードとして、「今、そしてこれから、自分ができることは何かあるのか？」と前向きに捉えている感想が多くみられた。また、モンゴルの異文化を理解することは、日本について、自分自身について改めて問いかけのきっかけとなり、自国・自己の理解にもつながるということに気づいた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

[成果の検証方法]

・授業中でのワークシート、授業後のアンケートを分析し、生徒の学習状況の評価をした。

・授業力評価表から自己評価を実施した。

・授業見学に来た教師との相互評価を実施した。校内研修での発表や私学教育研修会において発表してフィードバックを得た。

[成果]

・教科書の切り取られた1ページでなく、モンゴルでの経験を通じた生きた教材は、生徒の知的好奇心を喚起し、参加型学習においても自発的に取り組む様子が随所にみられ異文化を理解しようとする態度を育てることができた。教師自身が経験したことを通して、自分の目で感じ、気づくことの意義を改めて感じた。

・バーン村の実践から「必要な援助」について考えることができ、同じ高校生のエッセイから、国際協力を自分の遠いところにあるものではなく身近なものとして、日本が世界の人々と協力していく大切さ・支援の在り方を考えることができ、「自分にできる国際協力」として捉えることができたようである。

- ・教師の体験談、JICA隊員ムービー、生の青年海外協力隊員の講演などの実践から、JICAが今まで実施してきた国際貢献を知り、開発途上国で日本と途上国のために汗水流し活躍している日本人がいることを理解することができた。
- ・東日本大震災の被援助国としての日本の姿から「相互扶助」を考え、日本は世界の国々となつがっていること、私たちは社会の一員であり、今も、高校卒業後も、現在の様々な課題をより良くすることができるのは私たちであるという将来像を実感することができた。
- ・教師が考えた以上に、生徒は異文化へ関心を示し、フोटランゲージにおいても様々な視点から考え発言してくれた。援助に関しても「相手を知り、相手の立場に立ってみる」というところまで深めて考えた生徒もいた。

[課題]

- ・他者と協力する態度を育むために、参加型の授業を精選した上で、実践機会を増やしていく必要性を感じた。さらに、モンゴルで入手した映像、写真、資料、経験談が数多く、授業において興味関心を引き出そうと「下手な鉄砲数撃ちゃ当たる」的な乱雑さで、柱が上手く通っていない中、利用した面が多々あった。今後は多くのネタを、柱を立てた上で、順序に沿い、精選し、利用していく必要性を感じた。
- ・異文化理解にあたって、遊牧民の暮らしが「スーテーツアイ⇒しょっぱい、まずい」「トイレ⇒汚い」「風呂⇒ない」から、日本と比較して「モンゴルは不幸せで、日本は幸せ」とステレオタイプ的に直結してしまう不十分な側面もあった。さらには、「何を持って幸福とするのか、モンゴル人は不幸で、日本人は幸せなのか?」と、「幸せのあり方、人の生き方」の問いを発し、単元目標に掲げている高校卒業後の将来設計に対してアプローチし、自らの生き方を深めていく必要があった。
- ・多面的なアプローチが十分でなかったので、ウランバートルの都市部に住んでいる人と、地方の遊牧民に焦点を当てて、モンゴルの一般的共通性と地方的特殊性の視点から追究し、モンゴルの地域の課題や将来像についても踏み込んでいく必要性を感じた。

[課題の改善策]

- ・検証に基づき、学習内容の見直しを行い、ワークシートなど作り直した。
- ・生徒の学習状況を把握しやすくするため、授業後のアンケートを作り直した。
- ・生徒に何を伝えたいのか、どうさせたいのか、計画の柱を念頭に実現のための工夫をする。
- ・発問、厚生、板書計画などについてじっくり研究、準備をする。
- ・教材の更なる焦点化および具現化をする。

10 教師海外研修に参加して

「先生たちに教わる生徒さんたちは本当幸せですね。」

モンゴルのバスケットボール指導で青年海外協力隊として活動している池田隊員の活動に触れ、最後にお別れする時に頂いた最上級の褒め言葉だ。自分がこの言葉に見合う人間かどうか置き換えてみた。「まだまだ相応しくない・・・。」と。

以前より、青年海外協力隊の活動に興味があり、10 日間の教師海外研修を通して、2年間の長期の派遣を考えたいと思い応募した。クラスにおいても部活動(テニス部)においても、生徒に対して「挑戦し続けることの大切さ」を私は訴えてきた。では教師である私自身はどうだろう。教師という職業は、自分自身の世界に凝り固まってしまう傾向が強く、積極的に殻を破り、外の世界を見て、自分の視野を広げていかないと「裸の王様」になってしまいがちである。「口で言っているだけではない。」証しの一つとして、旅行ツアーではなかなか行けない開発途上国に飛び込み、新たな出会いの中で、自分自身を鍛え、知見を広げていきたいと切望した。

実際現地に行ってみると、見るモノ触れるモノの全てが脳みそを揺さぶり、他者の目を通してではなく、自分自身の肌で直接感じることの大切さを改めて感じた。そして、国際協力の現場で奮闘しながら挑戦している隊員の姿は、純粋に「美しい生き方」に感じた。そのような隊員の「カッコ良い生き方」を伝えること、そして私自身挑戦していく姿を見せることが、生徒に考える有益な機会を提供できるのではないかと感じた。私自身、隊員たちの生の姿に触発され、情熱溢れるモンゴルチームメンバーとの出会いを通じて、新しく見えてきたもの、気づかされたことも多い。

生徒の感想の中に、「先生の授業から青年海外協力隊に積極的に参加し視野を広げてみたい」と。これだけでも救われる思いだが、これからも国際協力の学校の中の発信源として、能動的に挑戦し、少しでも池田隊員から頂いた言葉に近付けるように多くの機会を提供していきたい。